
白昼夢

男里 翔舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白昼夢

【Nコード】

N3480I

【作者名】

男里 翔舞

【あらすじ】

白昼夢「はくちゅうむ」……目覚めているときに見る現実味を帯びた非現実的体験や、現実から離れ何かを考えている状態を指す語。

気が付くと、お昼ちょうどだった。

俺はまだ寝ている体を無理やり起こし、公園のベンチから立ち上がった。

日曜日とはいえ、最近の公園は静かだ。子供たちはテレビゲームに走り、カップルも映画館やゲームセンター等の娯楽施設へと流れていく。

しかし、それにしてもさっきまで遊んでいた健や太陽までいないのは流石におかしい。

いや、それだけじゃない。眠い頭を振り起こし俺は気付いた。

さっきから車のエンジン音や何らかの人の声等の音——生活騒音と呼んでも良いか——が一切聞こえないのだ。まるで、俺以外の人間がいらないみたいに。

耳がおかしいのかと思った。だけど蝉の声や秋の訪れを伝える虫の声は確かに聞こえている。

やはり、人の気配だけが一切ないのだ。

それに気付いた時、俺は思わず自分の頬を叩いた。良くある夢だ、シチュエーションとしてはありきたりじゃないか。

だが、乾いたピシヤリという音が響き痛みが頬を走った以外に何も変わる事は無かった。

眠気が一気に吹き飛んだ。状況がまったく理解できなかったが、異様なまでの静けさは俺の心に不安の影を投げかけるには十分な効果があった。

まったくわけが分からない。一切の人の気配が無い中、俺はとりあえず家に帰りながら町の様子を見回ることにした。

花壇とちよつとした遊具、そして明らかに不釣り合いな噴水がある小さな公園の中を進み、二つある出入り口の一つ、北口へと向か

う。

そして小さな門から外へ出ようとした時、後ろから聞き慣れた声がした。

「慎二い……此所にいたのか？」

「健、健なのか？」

やっと聞こえた聞き慣れた声。俺は思わず振り向いた。

やはりそこには健がいた。野球まがいのゲームで遊んでいた格好そのままに、バットを肩に乗せて持ちながらほほ笑んでいる。ああ、いつもの健だ。

「健、ああ、良かった……居たんだな。」

俺はふう、と溜め息を吐いた。何処に居たかは分からなかったが、きつと同じように訳の分からない状況に戸惑っていたのだらう。

「どうなってるんだらうな？ まったく人の気配がしない……何か知ってるか？」

俺はそう言いながら健に近付いた。健は何も言わずニコニコした表情で俺を見つめている。

「……？ まあいいや、今から家に帰りながら町を見るつもりなんだ、一緒に来るか？」

いつまでも黙ったままほほ笑む健を不思議に思いながら、俺は健の肩に手を置いた。親しい誰かに対して俺が提案するときの挨拶みたいなものだった。

その時、健の金属バットが思い切り振り下ろされた。

防御本能だろうが、体が反射的に右に避ける。頭を目掛けて振り下ろされたバットが左肩を強打する。何もしてなければ今頃はこうして思い出話を語っていることも無かっただらう。直後に強烈な痛みが肩に訪れたものの、俺がその現実を受け入れるのには少し時間がかかった。

「うふふ……あはは……！」

不気味に笑う健。その様子を俺は肩を庇い後退りしながら見つめ

る。

「……何するんだよ健、俺が何かしたか？　喧嘩吹っかけるにも頭狙うのは反則……」

やっと絞り出せた声。しかしその声は途中から震えが入った。

突然健の右腕が変形し始めたのだ。

肩が大きく膨らみ、服を内側から押し破りながら急な発達を遂げる。

腕もそれに伴い太くなり、まるでバットを握りつぶすかのように力を込め握り締める。

なんだよこれ、安っぽいアクション映画みたいじゃねえか。そう考えたのもつかの間、体中を恐怖が走りぬけた。

少なくとも、健はまともじゃなくなってる。俺を殺す気だ。

逃げようと踵を返そうとしたが、まったく動けない。このままだと殴り殺されるのは目に見えているのだが体が言うことを聞かない。

「ふふ……慎二い……遊ばうぜえ……？」

半ば叫ぶ様に健が言う。と、同時に再びバットが振り上げられた。何処かでカラスが鳴いた。まるで死の宣告のように。

駄目だ、このままじゃ。そう思った瞬間、硬直の呪縛が解けた。

俺は後ろを振り向かず脱兎の如く逃げ出した……

私は店のカウンターから外のフードコートの様子を覗いていた。
店——ステーキとハンバーグの店——の外、すなわちフードコートの中を変わり果てた店長が歩いている。

腰を大きく折り曲げ、顔をうつぶせにしたまま徘徊している。手には大振りの肉切り包丁が握られている。この店の仕込みに使用するよく手入れされているものだ。キッチンの包丁立てから無くなっているのはさつき確認したばかり。

そして店長の背中からは大きな目が出現していた。

発達したその部分だけ綺麗に裂け目が出来、出来損ないの瞼の様に開いたり閉じたりしている。

私は信じられない思いでその様子を見、多分10分はこうして隠れている筈だ。

どうしてこうなったのだろう。私はふと考えた。

こうやって隠れている間、同僚はおるかお客さんの姿も一人も見掛けない。ということは私が休憩中にふと気を緩めてうつらうつらしている間に店長の様な人間が何人が現われて避難したと見るのが良いのか……

でもそれならば何故私を起こしてくれなかったのだろう。それに騒ぎで目が覚めている筈だ。

しかも、店長がもしあの包丁で人を殺そうとしているなら……眠っていて動かない私を真っ先に狙う筈だ。店から外に出るためには休憩室を通らなくてはならないから嫌でも目につく筈。

やはり、突然人が消えてしまったのかな……ならどうして私だけ残ったのか。そしてどうして店長は……

考えても始まりそうにない。

私はとにかく店から出るべく、行動を起こそうと決めた。

まず、何かあった時に身を守るものが必要。私はそつとキッチンへ向かい、包丁立てに置いてある万能包丁を手にとった。店長が持っているものよりも小さいけれども家庭用のものと同じぐらいの大きさに良く切れる。

使うことにならなければ良いんだけど……そう思った途端、不安が頭をよぎった。

此所からどうやって出たら良いの？

再びカウンターから店長の様子を覗く。店の前をうろつきながらも、じつと見ていると一定のルートがあるみたいだった。

でも、どれだけ遠ざかった状態でも出入り口から10mも離れていない。見付かれば……何もしてこないかも知れないし、殺されるかも知れない。

それに、何処に逃げるかも問題だ。

目の前のテラスへの出口へ行けば直ぐに外に出られる筈。でも障害物のほとんどないフードコートを端から端まで走らないといけない。確実に途中で見付かってしまう。他の出口も遠すぎる。

あ、そういえば……店の横にお客様トイレ用の通路がある。そこを通れば専門店街に出られる。

ルートは決まった。あとはタイミングだけ。

ふと洗い場を見ると、片付けかけの鉄板と一緒に木製の敷き台がそのままになっていた。

道が、今度こそはつきりと見えた。

私は手にした敷き台を握り締め休憩室のドアの隙間から店長の様子を伺った。

チャンスは一回きり、失敗すれば間違いなく店長は店の中に入ってくる筈。そうなると逃げ場も隠れ場所も無い。

私は肩に掛けた鞆の中をちらりと見て決意を固めた。

中には……店長の従業員証が入っている。更衣場の床に落ちていたものを拾っておいたのだ。一種の、形見として。

何があつたかは分からない。でも、もうあの優しい店長は……多分いない。

此所にあの時までの店長がいる。きっと守ってくれる……そう考えると勇気が出てきた。

あとは実行するだけ。

私はドアから店長を覗き見た。

彼はトイレの向こうにある井屋の方を見ている。

よし、今だ。

私は敷き台を思い切り前へと投げた。

投げた敷き台はフリスビーの様に飛んでいき、大きな乾いた音と共にたこ焼き屋——この店の反対側の店舗——の前に落ちた。

「誰だ？ うへへ、へへ、へッ……」

店長が不気味に笑いながら移動している。どうやら成功みたいだ。ドアの隙間から敷き台を投げた辺りを覗く。店長は……そこに向かってる！

今しかない。

私はそつとドアを開け、出来るだけ姿勢を低くしてトイレへの通路に駆け込んだ。

後ろを見ずに真直ぐ専門店街へと抜ける。

そこにはがらんとした店が寂しく並んでいた。

いつもと変わることなく流れるBGMが、かえって不安を煽った気がした

団地までたどり着いた。その安堵が心を一杯にした。

此所に来るまでほとんど走りつ放しだった。健だけじゃなく他にも化け物みたいになった奴がいてもおかしくないけど、幸いにも遭遇はしなかった。

途中誰かを見掛けた気がしたけど気にしなかった……視界の隅のそいつは、少なくとも足だけが異様に太く見えたからだ。

まともな奴はいるのか？親父は、お袋はどうなったんだ？……俺はそればかり考えていた。

ある意味では答えは目の前にある筈だ。この時間ならお袋は家にいる筈だからな。そう思ってもやっぱり確かめるには勇気が必要だった。

大きく深呼吸をする。息を吐き出しながら嫌な気分を忘れる為に。そして意を決して階段を上り始めた。

いつも使ってる筈の階段がとても長く感じられる。3階まで行くのに10分以上掛かった気がした。

腕時計を見るとあまり時間が経っていない。人の心って面白いもんだな、とぼんやりと考えていた。

302号室の扉をゆっくりと開ける。馴染んだ匂いが鼻を満たす。ああ、こんな時でも家は家だな、と感じる。

この時間、お袋は大抵昼寝をしてる。親父が仕事に出ている時はいつもそうだ。親父は仕事の手直しか何かで現場に行っている筈だ。日曜だったのに、もうちょっと融通が利く会社なら良いのにと毎回思う。いくら早く家を建てるのが売りとはいえ……

俺はこんな状況にも関わらず場違いな事を考えながら居間へと向かった。

居間を覗くと、そこにはテレビを付けたまま寝転がるお袋の姿があった。見たところ特に変わった様子はない。

テレビは何てことのないバラエティ番組を写している。空しくギヤグを織り込んだ内容に今は笑う気にもなれない。

一方のお袋はテレビを見つめながら時々含み笑いをしている。最近勧められてやったホラーゲームに一家が怪物化したステージがあったがその母親よりは……いや、考えたら駄目だ。俺は現実とゲームの区別もつかなくなったのか？といってもこの状況はとても現実とは言いにくいけれど……

「……お袋？大丈夫か……？」

そつと陰から聞く。その声に振り向いたお袋は一瞬不思議そうな顔をしたもののすぐにいつものほほ笑みを浮かべた。

「あら、あんた帰ってたの。全然分かんなかったわ。」

「それよりお袋、大丈夫か？何処もおかしくないか？」

少し離れた状態で話し掛ける。信じたくはないが……お袋が健みたになることは十分に

「何言ってるのよあんた、変な夢でも見たんじゃない？健くんがおかしくなったとか。」

……夢？

今まで全部夢だったのか？

なるほど、そう考えれば全て合点する。

俺はなんだとすつきりした気分でお袋に近付いて

左肩に鈍い痛みを覚えた。

ここは……健に殴られた場所じゃないか。夢ならどうして痛みが残るんだ？

しかもお袋、仮に夢だとして、どうして夢の内容を知ってるんだ？俺は思わず後退りした。

「どうしたのよ慎二、母さんが怖い？」

お袋が立ち上がった。手には刺身包丁——親父がいつも使ってい

る柳葉包丁——が握られている。陰になって見えない部分に置いていたらしい。

「あ、ああ、あ……」

俺は情けない声を上げる。予想はしてたとはいえ……お袋がこんな事になるなんて……

「大丈夫よ、怖くないわ。すぐに……ふふ、あはははは……！」

俺は後退る。それをお袋は笑いながらじわじわと追い詰めて来る。そして、変化が見えた。

腹部から胸部にかけて縦に裂け目が入って

「あ……あああああ！」

いや、裂け目なんかじゃない。

それは巨大な口だった。

こんな状況、耐えられない。知らぬ間に叫び声を上げていた。

しかし、既に逃げ場はない。玄関のドアが無情にも背中当たった感覚があった。

駄目だ。ドアを開けようとしたらすぐにでもお袋は……

でもお袋はもう目の前にいる。万事休すってこういう事だな、なんて考えが頭をよぎった。

くそっ……このまま俺は実の母親に殺されるのか。

泣きたくなった。久々の感覚だった。

涙を堪えて俯く。と、傘立てが目に入った。

俺はその黒い傘——親父がいつも使ってる奴だ——に飛び付いた。

「あははははは！ 慎二、馬鹿な真似は止めなさい！」

お袋の笑い声が突き刺さる。

俺は傘を持ってお袋に向かっていった。

俺は傘を腰だめに持ってお袋に向かっていった。

歩数にして約三步。それを一つ飛びに飛び掛かる。

そしてそのまま腹の口目掛けて傘を突き立てた。

形容し難い手応えが伝わった。傘は口を貫き背中からその先端を「ぎあああああ！」

覗かせた。一瞬遅れて響く絶叫。顔の口と腹の口から溢れた声は黒板を引つ掻く音にも似ていた。

俺はさつと飛び退いた。瞬間、俺がいた場所に刺身包丁が閃いた。完全に死ぬまでは至らないかもしれないがかなりの痛手を与えたことは間違いない。

「慎二い！お母さんに何てことを！」

変わり果てたお袋、いや、お袋だったものが叫ぶ。右手に握った刺身包丁をわめきながら振り回し、左手では腹の口に刺さった傘を抜こうとしている。

しかし、もう俺に恐怖心は残っていなかった。

俺は今度は近くの木製バット——さっきは奴が近すぎて取れなかった——を握っていた。

「わあああああ！」

そして化け物の頭目掛けて——当然包丁には気をつけなければならなかったが——振り下ろした。

鈍い感覚が手に伝わった。

それきり、化け物の怒りの声は止まった。

酷い疲労感が体を支配した。

そして、化け物になったとはいえ、自分の母親を手に掛けたという事実が頭を駆け抜けた。

俺はこの事態に陥ってから初めての涙を流した。

いつの間にかすすり泣きは嗚咽に変わり、気が狂ったみたいに泣き続けた。

どれぐらい泣き続けただろう。俺は涙の名残を拭き取り、立ち上がった。

そしてお袋の体を見やり……妙なことに気付いた。

お袋の体からは、一切の血が流れ出ていないのだ。相当な出血量

になるはずの、腹部に突き刺さった傘の傷からさえ血の染み一つ浮かび上がっていない。

こうするのも気が引けるが、傘を恐る恐る引き抜いてみた。それでも血は流れない。それどころか、傘には一滴の血も付着していない。

どういうことだ？これじゃまるで

（血抜きした魚）

最初から死んでたみたいじゃないか。

自分の考えが妙に現実味を帯び、ぞくりとした。消えた人間。残った俺。

血のない化け物になった人間。

俺は決して賢くない。だが一つだけこの事態に対して分かることがある。

異常。常識の通用しない事態。

俺は汚らしいもののように傘を投げ捨てた。同時にどつと笑い声が響く。

俺はバットをテレビに投げ付けた。爆発する様な音と共にブラウン管が碎けた。

もう、何も信じられなくなった。

目覚めた時、私は詰め所のソファで横になっていた。

壁に掛かった鳩時計を見る。12時18分。目を瞑ってからさほど時間は経っていないものの、数時間寝ていた気がするのは何故だろうか。

そして、ふと気付いた。いつもより静かだということに。

何故かは分らないが、嫌な予感がする。私はソファから起き上がり、机の上のすっきり冷め切ったコーヒーを飲み干した。ほろ苦い味が喉を滑り落ち、寝ぼけた頭を覚醒させる。

そして白衣を羽織り、不審に思いながらも廊下の様子を覗いた。

いくら小さい医院とはいえ、看護師たちの足音さえ聞こえないのはおかしい。人影一つない廊下に出、201号室を覗く。此处には唯一の入院患者である学生がいた筈だが、2つあるベッドはどれも空だった。

いや、退院したわけではない。彼がいたベッドのシーツは乱れ、近くには綺麗に並べられたスリッパもある。しかも、食べ掛けの食事まで置いてあるではないか。大体、退院許可を出すにはまだ早い。では彼は何処へ行ったというのだ。ただの外出ならばスリッパを履いていく筈だ。

私はじっくり考えた挙句、かぶりを振った。彼の失踪が異様な静けさと関係あるかとも思えたが、それならば騒ぎの断片が耳に入った筈だ。寝入ったのは正午前だったのだから。

とにかく、病院がすっかり空になっているとも思えない。私は状況を誰かに尋ねるべく、院内の探索を始めた。

私は二階の部屋を次々と見て回った。

202号室、203号室、会議室、調理室も調べたが、誰一人と

して見つからない。

二階には誰もいないのか。時々あることではあるが、異様な静けさの中だと薄気味悪い。私は慣れ親しんだ階段を妙な焦燥感と共に降りていった。

一階に降りてすぐにロビーを確かめる。昼の診療時間は1時からなのだから誰もいなくて当然だが、だからといって先程から感じる妙な焦燥感が消える訳ではない。

看護師詰所の扉を開ける。普段三人の看護師が常駐している筈であるが、此処にも誰もいない。

何処に行ったのだ。そう考えるよりも早く私は踵を返していた。休憩時間に医師、看護師がいなくなる理由は限られてくる。しかも入院患者までいなくなっているのだ。

私は廊下の突き当たり、手術室の扉を押し開けた。

しかし、そこにあつたのはがらんとした処置台だけだった。いや、その表現は正しくない。処置台の横に白衣の男が立っていた。

「安谷先生……こちらにいらしたのですか。」

「ああ、松井君。えらく慌てた様子だがどうしたのだね？」

落ち着き払った様子で院長が言う。何事も無いように話すということは、何も起こっていないということなのか？ それとも……

「院長……看護師たちの姿が無いのですが、何処に行ってしまったのでしょうか？ 入院している山下君も居な」

「ああ、彼女達か。彼女達なら心配いらない。無事だよ。」

それより君にはやってもらわねばならない事があるのだ。」

院長は私の言葉を遮って話を続けた。いつもならば話の腰を折る様なことはしないはずな

「緊急オペだ、松井君。今すぐ準備したまえ。」

オペだと？ 患者もいないというのに誰をオペするというのだ？

「一体どういう事ですか、誰をオペすると」

いつのですか。そう続ける前に、左脇腹に衝撃が伝わった。

「患者は君だよ、松井君。」

一瞬遅れて伝わった激痛に、私は思わず声を上げうずくまった。

一瞬、院長の手に握られた外科用鋏が目に入った。

何が起きたか分からなかった。血の付いた外科用鋏がちらりと見えても、腹部の傷から流れる血が白衣を赤黒く染め上げていても、それが非現実の様に思えてならなかった。

「な……何故……？」

私は痛みを堪えながら漏らす。逃げなければと頭が警鐘を鳴らしているが体に力が入らない。

「何故？」小馬鹿にした様に安谷が言う。「君はまだ気付かないのかね。自分が既に人ではないということに。」

恐らく痛みで頭が鈍っていなくとも、その言葉の意味は理解出来なかっただろう。だが、私はその時既に彼の言った事が理解出来ていた。

安谷の腕が伸び始めたのだ。

白衣の袖が千切れ、もう一つの関節があらわとなる。二の腕がもう一対出来たかの様にそれは成長し

「君はもはや人間ではない。進化に乗り遅れた劣等種だ。だからこそ進化の……」

もはや安谷の話聞く気にはなれなかった。私は傷口が痛むのも構わず手術室を飛び出した。

今思えば、私は半ばパニックに陥っていた。訳の分からない現実を腹に突き刺され、正常な判断を破壊されたのかもしれない。

私は右に折れた。その先はエレベーター、乗り込めば少なくとも当面は逃げられる、そう信じてやまなかった。

6 m程の距離を傷を庇いながら早足で駆け、上昇のボタンを押す。ボタンは点灯したが、扉が開く様子はない。

上の階にいるのだ、くそ。何週間振りかの罵りを心の内に漏ら

し、後ろを振り向いた。

そこには安谷が笑みを浮かべて立っていた。

「諦めるのだ、松井君。間に合うまい。」

安谷は鋏を振り上げた。

死ぬのは嫌だ。私の頭の中で生存本能が閃いた。

私は一切を賭けて安谷の懐へ向かっていった。

その時、乾いたパンという音と共に、安谷の額が吹き飛んだ。

私はそれに気付かぬまま彼を突き飛ばし、数回顔を殴った後にやっと事態の急変に気付いた。

ふと顔を上げると、飲食店風の制服を着込んだ若い女と、信じられないという風に口を開いたまま拳銃を構える警官が立っていた。

迂闊だった。そう、迂闊の一言でしか表せない。

従業員通路を通れば少なくとも人目には付きづらいかも。そう考えて私は専門店街を横切りこの狭い通路を選んで外を目指していた。店長の姿はそれだけ異様だったし、人への信頼というものに警戒を促させるのには十分すぎた。

従業員入口の手前にある警備員詰所。そこさえ抜ければ外に出られる。私は反射的に懷の従業員証を取り出そうとして、大きな失敗に気付いた。

想定しておくべきだった。警備員がいる可能性を。

「お疲れ様です。」不意に横から掛けられた声に飛び退く。いつも手荷物検査を行う警備員の顔がそこにあつた。満面の笑みを浮かべ、手にはプラスチック製と思われる警棒を持って。

見た目には異常な様子は見られないが、笑顔の瞳の奥に宿る光は狂気としか言いせない。

脱出路を塞がれた上に狭い通路。逃げたとしても隠られる場所はないし走りには自信が無い。

やっぱり戦うしかないの？ 私は動揺が抜け切らないまま手に握った包丁を震える手で警備員に向けた。一番やりたくないと思っていた行動、人に凶器を向けるという過ちを冒した瞬間だった。

もはや正常な考えなど捨てていた。誰かまともな人間もいるかもしれないという一抹の希望さえも持ち合わせてなかった。だからこそ目の前の警備員が「人でない」と思い込んでたし、今もその確信は揺らいでない。

しかし目の前のそれはどう見ても人。その事が一瞬の判断の遅れをもたらした。まあ戦い慣れなんか当然していなかった私にとってそれは些細な反応の遅れの欠片にしかならなかったけど。

「危ないですよ、止めなさい。」

そんな言葉が聞こえて来たと思った瞬間、横薙ぎに振るわれた警棒が側頭部に直撃した。強化プラスチック製のそれは予想以上に強い衝撃を与えた。

痛いというより重い一撃が頭を揺さぶる。思わず気が遠くなりかけた頭をこの世にとどめたのは原始的な生存本能だったかもしれない。

もう一度警棒が振るわれた。私はその一撃を左腕で庇うと包丁を持ったまま突撃した。腕に激痛が走ったけれど構ってはいられない。そのまま私は何も考えずに包丁を前に突出した。

何とも表現しづらい手応えが伝わった。野菜を切る手応えとも普通の肉を切る手応えとも違う、普通に生活していれば絶対に経験しなかったであろう手応え。しかしその感覚を知覚する前に私の手は包丁を引き抜き、再び警備員に突き出していた。

一切の音が聞こえない。何かをわめきながら警備員が警棒を振り回しめつたやたらに体を打ち付けているみたいだったけどその痛みさえ感じなかった。体中を駆け巡るアドレナリンが一切の感覚を遮断している様だった。

そして、気付いた時には目の前で仰向けに倒れる警備員が見えた。ズタズタにされた制服の間から見える肉の色……私はいつも入店確認を行う机の陰に這って行くとたまらず嘔吐した。

あれだけの刺し傷にも関わらず全く出血が無いという違和感に気付くのはもう少し時間が必要だった。

仕方なかったとはいえ人を殺めたという事に対する自己嫌悪の中、私は遂に外の空気を吸う事が出来た。

駐車場にずらりと並んだ車、そして駐輪場から溢れんばかりの自転車列。いつもと変わらない休日の風景の筈なのに、人の気配が完全に消え失せた今ではただ不気味という他なかった。

とにかく家に帰らないと。行くあても無い私の頭ははふと浮かん

だこの案に何の反論もせずに従った。

鞆を持ち直し駐輪場を抜け病院方面の出入り口を目指す。

足元がぐらりと揺れた。

私はなす術なくその場に倒れ込んだ。

さっきの警備員……咄嗟に思った事はそれだった。あの戦闘であちこち殴られた事が今になって響いたらしかった。

私は何も出来ないままその場で気を失った。駐輪場の近く、警察官立寄り所から一人の男が出てきた事には気付く事も無かった。

何故僕は此所にいるのだろう。まず最初に思ったことはそれだった。

確かにこの場所はよく知っている。この辺りの巡回は僕の仕事だし、この場所で悪がき達から話を聞いた事も一度ではない。

でも、どうしても思い出せないのだ。巡回の時間を忘れて眠りこけるほど長く此所にいた理由が。

寝起きでぼんやりとした頭を振り、無理矢理目を覚ます。とにかく巡回を始めなければ、今まで書くことの無かった始末書を書かされる事にもなりかねない。

ホルスターの拳銃——ニューナンプM60、五発装填の小型リボルバーだ——、腰の警棒を確かめ、ポケットの警察手帳も確認する。持つべき物があることを確認してから、僕は暑さの残る空の下に踏み出した。

直ぐにはその異変には気付かなかった。しかし、何か引つ掛かる感覚を辿っていき、やがていつもと何が欠けているのか気付いた。人。いつも人の出入りがあるはずの店の入口には人影一つなく、駐車場は出ていく車も入ってくる車もない。

これは……かなり大きなミスをしてしまったのかもしれない。そう思った矢先、目に決定打となる光景が飛び込んできた。

倒れた女性。肩から鞆を掛けたウェイトレス風の服装。この服装には見覚えがあった。この店のフードコートにある店の制服だ。

何があったのか。そんなことを考える暇は無かった。もはや自分一人で何か出来る問題ではなさそうだった。僕はもう躊躇うことなく、同じ場所を巡回している筈の同僚に無線を入れた。

無線は無言のまま、何の反応も示さない。まさか佐伯までいなくなっただのか？ 一体どうなってるんだ？ 無線機の故障ではないの

かとも疑ったけどもそうではないようだ。

仕方なく本部へと繋ぐ。しかしこれも全く反応がない。仕方なく無線を切り、ホルダーに納めた。

視線を落とすと、彼女の痛ましい姿が再び目に止まる。連絡がつかないなら仕方が無い。僕は彼女を背負い、落ちていた肩掛け鞆を首に掛けるとすぐ近くの小さな病院を小走りで目指した。勝手な行動による懲罰のことは後で考えれば良い。

病院の入口へと来た時、彼女が目覚めた。途端、彼女は僕を突き飛ばし――当然ながらおんぶの体勢であつた彼女はバランスを崩し背中から落ちた――ふらふらとした足取りで逃げ出した。

「ちょ、ちよつと待ちなさい！」

状況が全く飲み込めないまま彼女を追いかける。従事者が言うのもあれだが警察官の制服はそれなりの信頼感がある。それでも逃げるのは何か原因がある筈だ。

足がふらついている彼女に追いつくのにはさほど時間は掛からなかった。しかし明らかに錯乱している彼女を無理に刺激は出来ない。

「頼む、待ってくれないか？　僕は何もするつもりは無いんだ。」
両手を上げて敵意が無い事を示す。初めは信じられないと言う様な目をしていた彼女も、次第に落ち着いてきたのか目付きが和らいだ。

「ごめんなさい、お巡りさん。私、てつきり……」

そこまで言うと、彼女はいきなり吹き出した。そういえば、僕の首には彼女の鞆を掛けっぱなしだったのだ。確かに他人から見れば奇妙な姿に違いない。

「あ、いや、これは……　これ、君のだよね？　返しておくよ。」
首から鞆を外し、彼女に渡す。彼女はそれを受け取り、肩に掛けた。

「ありがとうございます……助かりました。病院ということは……」

……」

「うん、どうも頭も打ってる様だったからね。詳しく事情を聞かせてくれないかな？ その傷の事。」

僕達は会話を続けながら病院へと入っていった。院内も火が消えた様に静かだ。受付にも人影はなく、壁に掛かった時計以外に動く物はない。

「はい、多分人がいなくなった原因と関係あると思うんですけど、その時、遠くで何かを叩く様な音が響いた。何の音かは考えなかった。そこに生命活動を感じた僕は、何も考えずに走り出した。」

「なんだ、あれは……？」

その光景は、一瞬今まで扱ってきた傷害事件と何ら変わらない様に見えた。脇腹から血を流しながらエレベーターを背に絶望的な表情を浮かべる白衣の男。そして表情は伺えないけれど彼を追い詰めるこちらも白衣の……

いや、何かおかしい。その違和感の正体に気付いた時、思わず僕は言葉を漏らしていた。

「また……店長と同じ……」

「え？」

少し遅れて追いついた彼女が呟いた言葉に思わず反応してしまう。まさか、これが彼女の言いかけた「人のいなくなった原因」なのか。そう察するのに時間は掛からなかった。

「お巡りさん、あの人を助けて！ きつとあの人……」

「分かってる！ でも……」

迂闊には手を出せない。拳銃を使うにしても流れ弾が医師に当たる可能性があるし、警棒にしても化け物じみた相手の懐に飛び込む必要がある。しかも忍び寄るには遠く、気付かれれば接近は難しくなるから走り寄ることも出来ない。

必然的に拳銃を使わざるを得ない。しかし

「あつ……！」

思考は彼女の小さな叫び声に掻き消された。異形の医師は血に染

まいった刃物の様な物を振り上げ、傷付いた医師に迫る。

迷っている時間は無かった。

僕は常日頃練習してきた動作でホルスターからニューナンプを取り出すと撃鉄を起こした。狙いを頭部に定め、躊躇いなく引き金を引いた。

乾いた音が響いた。手に久し振りの射撃の反動が伝わり、直後に硝煙の匂いが辺りに広がる。

命中を確かめる間も無く、医師が異形の男を殴り倒した。必死の形相で殴り付ける彼はまさしく背水の陣を身体で示していた。

一方僕は傍から見れば情けない姿をしていたに違いない。射撃体勢のまま未だに自分がしたことを受け入れられずに立ち尽くしていたのだから。

やがて、白衣の男は顔を上げた。一瞬の間の後、彼の目に希望の光が宿った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3480i/>

白昼夢

2011年11月17日19時15分発行